九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[017_1983]第十七回中央図書館貴重文物展観目録 : 平安後期物語とその周辺

九州大学附属図書館中央図書館

辛島, 正雄
九州大学文学部 :助手

https://doi.org/10.15017/1485011

出版情報：大学広報. 481, pp.1-9, 1983-09-14. The Committee of Public Relations Kyushu University
バージョン：
権利関係：

大学広報 №481
昭和58年9月14日発行
（編集）
九州大学広報委員会

第十七回中央図書館貴重文物展観目録

（中央図書館）

平安後期物語とその周辺

はじめに

展観に際し教職員や学生諸君が多数来館されるよう希望します。

なお、今回の展示資料の選定、解説、指導、配列等について文学部辛島正雄助手に多大の御尽力を頂きました。ここに厚く御礼申しあげます。

記

展示場所：中央図書館メインロビー

展示期間：昭和58年　9月20日（火）から
　　昭和58年10月22日（土）まで

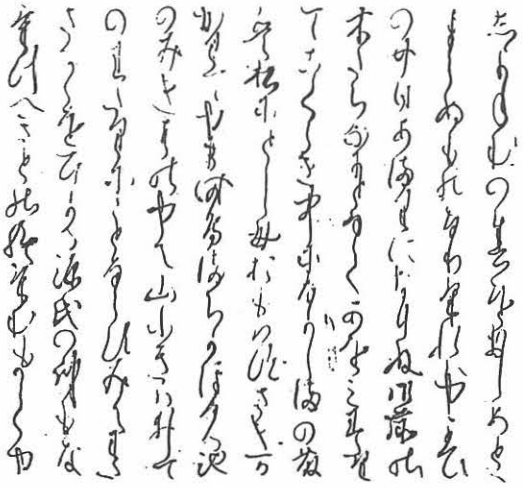
展観資料の解説

空前の大作『源氏物語』の出現によって極点に達した物語文学は、その後、摂関政治体制の動揺、院政の施行、武士の抬頭という古代末期の歴史的混乱の中で、創作の母体であった後宮文化の衰微に伴い、爛熟・退嬰の道を辿って行くことになる。

今回の展示では、こうした物語文学の黄昏期に産み出された作品のうち、「少年の春は」で始まる意匠に満ちた冒頭表現で知られ、中世期には『源氏物語』と並び称されるほどに声価の高かった『狭衣物語』を中心に、『とりかへばや物語』『堤中納言物語』『住吉物語』『しのびね物語』の四物語を選び、これに配するに、作り物語に対する事実物語たる歴史物語から、『栄花物語』と『大鏡』『今鏡』『水鏡』『増鏡』の＜四鏡＞をもってし、さらに貴族説話集の『宝物集』と『今物語』とを加えて構成してみた。

1. 狭衣物語

『狭衣物語』（四巻）は、１１世紀後半、六条斎院禖子内親王に仕えた宣旨という女性によって作られた長編物語である。主人公狭衣大将の義妹源氏の宮への叶わぬ片恋を軸に、彼をめぐる女人たちのさまざまな運命が描かれ、不如意な現世に身を置く狭衣の、やむことなき彼岸への憧憬が語られる。そこには『源氏物語』の影響が著しいが、全編にわたって愛の不毛とも称すべき主題が一貫して流れ、「宇治十帖」の続編ともいうべき物語世界を形成している。典拠をちりばめた華麗な文体と緊密・周到な構成とは出色であり、『源氏物語』とともに、後続の物語作品に多大の影響を与えた。



(イ)　狭衣物語

細川文庫本。枡型本（16.9×18.0 *cm*）、列帖装、八帖。近世初期写。各帖、金茶緞子表紙中央

の金泥草花ちらし題簽に「さころも」と墨書。本文料紙は楮紙。墨付は順に109・38・85・51・57・57・137・87・72丁。一面11行書。第一・二帖が巻一、三・四帖が巻二、五・六帖と七帖の一部が巻三、残りが巻四にあたる。本文系統は一貫しておらず、混態本。第五帖には錯簡があり、脱文も多い。第一・二・四帖にのみ奥書がある。元禄八年（1695）古筆了眠の極札が添えられており、各帖の筆者を順に、松殿道基・中院道純・飛鳥井雅章・東園基賢・大覚寺空性親王・実相院義尊大僧正・持明院基定・日野資弘であるとする。

(ロ)　古活字本狭衣物語

中央図書館蔵。大本（28.3×19.6 *cm*）、袋綴、四巻八冊。丹表紙左肩の刷原題簽に「狭衣巻第一（二〜四）上(下)」とある。一面12行。一行22字、字高22.3 *cm*。各冊表紙見返しに「全（共）八冊伊予守小野朝臣氏房」と墨書。

『狭衣物語』の古活字本には、「元和九年五月中旬　心也開板」の刊記をもつ12行本、これをもとにした無刊記12行本二種、別に無刊記13行本の計四種があるが、本書は、無刊記12行本(イ)種に属する（川瀬一馬『古活字版之研究』の分類による）。

『狭衣物語』は、その伝来の過程において多様な異本群を産み出してきたが、古活字本は、承応三年（1654）に刊行された整版本と同系の、所謂流布本系統の一種である。

(ハ)　狭　衣　抄

音無文庫本。大本（27.7×20.2 *cm*）、袋綴、一冊。近世中期写。紺色表紙左肩の原題簽に「狭衣抄　完」と墨書。本文料紙は楮紙。墨付141丁、一面15行書。「牘庫」（内藤露沾の蔵書印）の朱印あり。

書名「狭衣抄」は、『狭衣物語』の最初の注釈書である『狭衣下紐』（里村紹巴著。天正十八年成）の異称であるが、本書は、内容から見て、猪苗代兼寿著『狭衣物語抄』の一本である。本書の成立は、国立国会図書館蔵本の奥書により、天和二年（1682）のことと知られる。内容は『狭衣下紐』を増補したもので、巻末には系図並びに年立を収める。

兼寿は、猪苗代兼載七代の末流で、隣松軒と号し、京都に居住した、江戸初期の連歌師。元禄七年（1694）没。

(ニ)　狭衣系図

細川文庫本。枡型本（18.0×15.1 *cm*）、折本、一帖。近世初期写。雷文繋ぎ文様の紺色表紙左肩の、水色地金泥水辺柳文様の題簽に、「狭衣系図／伊勢物語系図」と墨書。本文料紙は鳥の子。墨付18丁（『狭衣系図』は15丁表1行まで）。

『狭衣系図』は三条西実隆の作といわれ、一般には承応版本付載の切臨校訂のものが知られているが、本書は、「私云」云々の説が付加される以前の、原型本と思われる。内容的には、疑問な点が多い。

(オ)　源氏狭衣歌合

細川文庫本。半紙本（22.2×15.8 cm）、列帖装、一帖。近世初期写。網目織布表紙左肩の、さや型金泥ちらし原題簽に「源氏狭衣歌合」と墨書。本文料紙は楮紙。墨付40丁、一面9行書。

「源氏狭衣歌合」は、藤原定家が後京極良経の依頼によって元久三年（1206）以前に撰したとされる「百番歌合」の俗称で、「後百番歌合」と合わせて『物語二百番歌合』を形作っている。内容は、左方に『源氏物語』、右方に『狭衣物語』の歌各百首を、それぞれ恋・別・旅・哀傷・雑の五部に類別して番えたものである。そこには、複雑な文芸的効果を狙った、明瞭な配列意識がうかがわれる。

伝本は、前稿本系（書陵部本系統）・後稿本系（定家自筆本系統）に大別されるが、本書は、末尾に付された作者目録より見て、後稿本系統と判断される。

2.　とりかへばや物語

音無文庫本。大本（26.8×19.6 cm）、袋綴、四巻三冊（巻一・二が一冊）。近世末期写。白茶色表紙中央の布題簽に「とりかへはや天（地・人）」と墨書。内題「とりかへはや一（〜四）」。本文料紙は楮紙。墨付は順に、116・89・81丁。一面11行書。本書は、山岡浚明校注本の写し。序文の署名に「明阿弥陀仏」とあることから、明和八年（1771）浚明出家以後に成った再校本系統と見られる。上部余白ならびに行間に、多量の書入がある。

『とりかへばや物語』には、古今二種のあったことが知られているが、現存するのは、改作本の『今とりかへばや』の方である。珍奇な書名は、女性的な若君と男性的な姫君をもった父親の、二人の性格を取り替えることができたなら、という嘆きから出る。従来、平安末期の狂躁的雰囲気の中での猟奇趣味の産物という仰々しいレッテルの貼られてきた作品であるが、性の転換という外枠の異様さを別にすれば、内実はまことにさもありぬべき、写実的な、悲喜こもごもの、いささかシニカルなドラマとなっている。

3.　堤中納言物語

音無文庫本。大本（27.1×19.1 cm）、袋綴、二冊。近世末期写。題簽はなく、薄茶色刷目表紙左肩に、両冊とも「歌」とうちつけ書きにする。内題もないが、上冊2丁表に全編の目次があり、「花桜折少将／このついて／虫めつる姫君／ほとほとのけさう／逢坂こゑぬ権中納言／かひあはせ／思はぬかたにとまりする少将／縹女御／はいすみ／よしなしこと／凡十帖」と記す。上冊に「逢坂こゑぬ権中納言」まで五編、下冊に「かひあはせ」以下五編が収められる。各編の配列は、現存諸本の大半を占める流布本系統のものに同じいが、「よしなしごと」に続く「冬ごもる空のけしき」云々の断章を欠く。本文料紙は楮紙。墨付上冊40丁、下冊47丁。一面9行書。

『堤中納言物語』は、物語文学史上異色の短編物語集として名高い。収められた十編は、それぞれがきわめて個性的であるというにとどまらず、成立事情も区々であると考えられるが、いずれも王朝物語文学の伝統を根深く受け継ぎながら、長編とはまた一味違った歯切れのよい＜をかし＞の世界を産み出している。作中の一編「逢坂越えぬ権中納言」は、天喜三年（1055）禖子内親王家物語合の際の作たることが明らかになっているが、全編が、いつ誰の手によって現在のかたちに纒められ、「堤中納言」なる題号が与えられたかは、定かではない。

4.　住吉物語

細川文庫本。半紙本（24.1×17.5 *cm*）、列帖装、一帖。近世中期写。表紙は、黄茶色地に卍繋ぎ等の文様を織り出す緞子。表紙中央、紅色地に金泥で雲水を描いた題簽に「住よし物語」と墨書。本文料紙は、鳥の子に金銀泥・切紙等でさまざまな文様をあしらった美麗なもの。墨付58丁。一面10行書。所収和歌25首（うち1首は本文中に混入）、寛永九年板本等流布本系統に属する。

『住吉物語』は、継子いじめの物語の鼻祖として、『落窪物語』と相並んで名高いが、享受の過程で幾度となく改変の手が入ったため、平安中期の姿を現存本から偲ぶことは不可能といったありさまである。古典中随一というべき激しい異本群をもち、作中歌も20首足らずのものから100首を越えるものまで、大きな幅がある。現存本の祖本は鎌倉時代くらいに成ったものかとされる。

5.　しのびね物語

音無文庫本。大本（26.9×18.8 *cm*）、袋綴、二冊。近世中期写。柿色表紙左肩の墨流し原題簽に、本文と同筆で「しのひね物語上(下)」と墨書。内題は「しのひ物かたり」。本文料紙は楮紙。墨付上冊38丁、下冊33丁。一面12行書。本文系統は、諸本中最も伝本数の多い第二系統（桑原博史『中世物語の基礎的研究』の分類による）に属する。

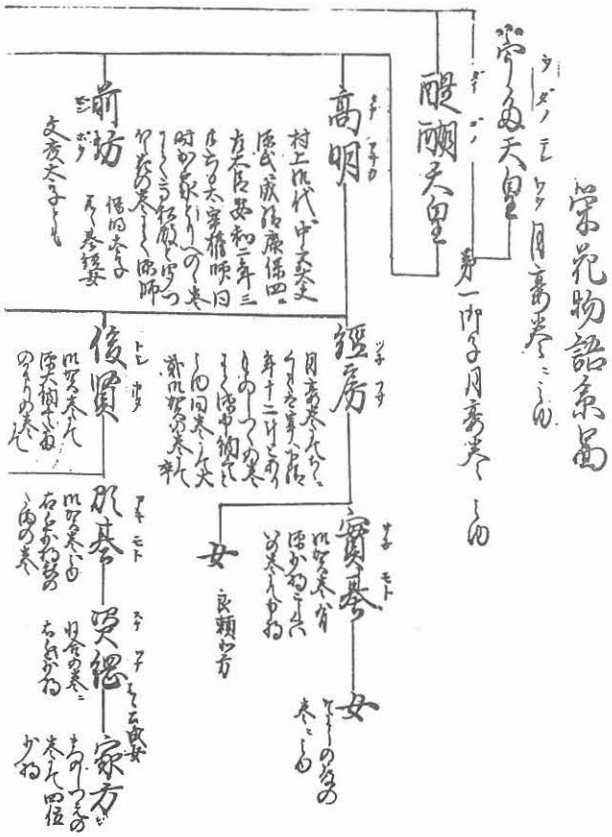
現存『しのびね物語』は、平安末期までに成立していた古本を、中世期に改作したものであり、内容は、内大臣の嫡男四位の少将きんつねと、中務の宮の遺児しのびねの女君との悲恋物語であるが、きんつねは世をはかなんで横川に遁世するが、女君は帝の寵を得て国母となり、現世の栄華を極めるという結末である。古代物語から御伽草子へと変貌して行く物語文学の崩壊過程を知る上で、最も注目すべき作品のひとつである。

6.　栄花物語

支子文庫本。大本（27.1×19.8 *cm*）、袋綴、三十二巻十六冊存（二・三・十一・十八の四冊を欠く）。古活字版。栗皮表紙中央の題簽（後補）に「栄花物語 七とりへ野 八はつ花」の如く墨書。各冊首に「栄花物語／一　月宴／二　花山」の如く巻名目次を付す。一面11行。本文字高21.2 *cm*。刊記はない

が、元和寛永（1615〜1644）中の開版とされる（川瀬前掲書）。

『栄花物語』は歴史物語の最初の作。全四十巻より成る長編であるが、藤原道長の死までを扱った前編三十巻と、それ以後の後編十巻に大別できる。作者には古来赤染衛門が擬せられるが、確証はない。おそらくは複数の女性の手により数次にわたって書き継がれたものと思われる。『源氏物語』の多大の影響を受け、編年体により、宮廷貴族社会の悲喜両面の記事を載せるが、中核は道長賛美にあると認められ、ほぼ同時期を扱いながらも、覇権争いの舞台裏までもあばき出す『大鏡』とは、好対照をなす。



（付）栄花物語系図

細川文庫本。大本（26.9×19.1 cm）、折本、一帖。近世初期写。表紙は、縹色斐紙に、雷文繋ぎに蓮・牡丹・唐草の文様を型押しする。表紙左肩の金切紙題簽に「栄花物語系図」と墨書。内題も同じ。本文料紙は鳥の子。墨付24丁。人名の横に多く貼紙をもってフリガナを施す。跋文に「此物語のうちにその名あまた待れとそよ／それとしらても聞ゆるはもらしぬをろか／なる女のしいたせることなれはこうせいの／くちをあはせかたきのみ」とあるが、同じ跋文が天理図書館蔵本にも

見られ、同本はさらに続けて「寛永八年六月辛未六日ニ作之者也」とあり、本系図の成立年次を示すものと思われる。

なお、本書は、先の『狭衣系図』と体裁酷似し、筆跡も似通っていることから、あるいは同時に製作されたものかと思われる。

7. 大　鏡

萩野文庫本。大本（28.4×19.9 *cm*）、袋綴、七巻三冊。近世中期写。朽葉色表紙（後補）左肩の題簽（子持枠あり）に「大鏡　上（中・下）」と墨書。本文料紙は楮斐混漉。墨付は順に87・100・84丁。第一冊首に総目次を置く。一面11行書。第二冊は、親本が第一丁を除いて最終丁から第二丁まで逆に綴られていたものか、甚だしい錯簡を有しており、親本の一丁分ずつ後ろから読まないと、文意が通じない。本文系統は、増補本文を有する流布本系統。「大澤書櫃」（石野広道の蔵書印）の朱印あり。

『大鏡』は四鏡の第一。文徳天皇から後一条天皇の万寿二年（1025）に至る、14代170年余を扱った歴史物語である。『栄花物語』の編年体に対して、『史記』等に範をとったと覚しき紀伝体であり、戯曲的構成で事件の裏表を浮き彫りにするなど、内容・形式ともに新機軸がうち出されており、後続の鏡物に絶大な影響を及ぼした。文体も和漢混交のキビキビしたもので、この点でも『栄花物語』の女性らしい冗漫さとは対照的である。

8. 今　鏡

細川文庫本。半紙本（23.5×16.9 *cm*）、列帖装、十巻十冊。近世中期写。表紙は石畳文様を織り出す緞子。見返し金切紙。表紙中央の題簽に「続世継第一（〜第十）」と本文同筆で墨書。内題同じ。本文料紙は鳥の子。墨付は順に48・49・36・50・52・70・49・39・31・29丁。一面10行書。第一冊首に総目次を置く。本文系統は流布本系。

『今鏡』は四鏡の第二。『大鏡』を継ぎ（本書外題「続世継」は、「世継」＝『大鏡』の続編との意）、高倉天皇の嘉応二年（1170）までの12代140年余を扱う。『大鏡』より一層本格的な紀伝本をとるが、内容的には、政治よりは文学・芸術等に関する文化的なことがらにより興味が向けられており、その点ではかえって『栄花物語』に近い。作者には、藤原為経（法名寂超）が有力視されている。

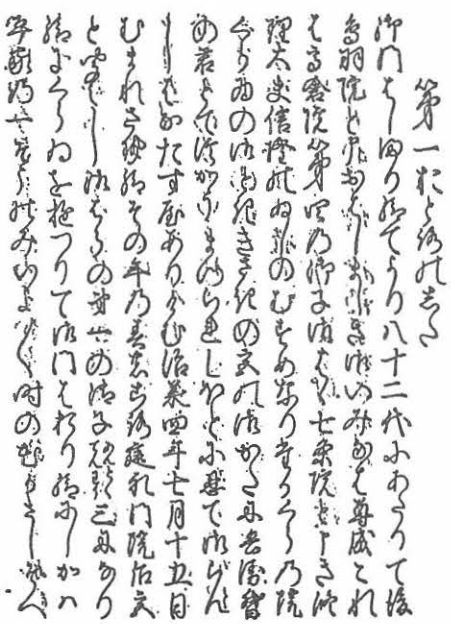
9. 水　鏡

萩野文庫本。大本（28.3×19.9 *cm*）、袋綴、一冊。近世中期写。朽葉色表紙（後補）左肩の題簽（子持枠あり）に「水鏡」と墨書。本文料紙は楮斐混漉。墨付115丁。一面11行書。巻首に目次

を置く。「大澤書櫃」の朱印あり。本文は流布本系統。墨及び朱による書入・校合あり。奥書に「本云／此水鏡申請大慈光院南御所御本妙御苦院物殿也借／卿掌待殿基中納言綱卿女筆今書写可秘蔵之／永正第九後四月十六日　古槐散木判」とあり、本書が宮内卿内待（勾当内待）筆本の転写本の写しであることがわかる。また、奥書のあとに貼紙があり、『薩戒記』（中山定親の日記）応永三十三年十一月十六日の記事を引いて、『水鏡』が中山忠親の手に成った証を示している。

『水鏡』は四鏡の第三。『扶桑略記』を基に、神武天皇から仁明天皇に至る５４代１５１０年の歴史を編年体で綴ったもの。上記中山忠親の手によって文治・建久（１１８５〜１１９８）頃に成ったかとされる。

なお、本書は、前記萩野文庫本『大鏡』と体裁酷似し、もと『大鏡』『今鏡』『水鏡』の＜三鏡＞揃いで作られたものが、『今鏡』のみ失われたものと思われる。



10.　増　鏡

支子文庫本。大本（２８.４×２０.８ *cm*）、袋綴、十九巻六冊。古活字版。墨色表紙左肩に「ます　上末」の如き、古活字で捺した仮原題簽がある（「上本」は剝落）。一面１２行。本文字高２２.８ *cm*。刊記はないが、同種活字の『大鏡』『水鏡』とともに、慶長元和（１５９７〜１６２４）中に刊行されたものとされる（川瀬前掲書）。本書は後の整版本の祖となったものであるが、巻次・本文等に錯乱があり、古本の面目を伝えていない。

『増鏡』は四鏡の掉尾を飾る作品。治承四年（１１８０）後鳥羽天皇誕生から元弘三年（１３３３）後

醍醐天皇隠岐よりの還幸まで、１５代１５０年余を扱う。『大鏡』の紀伝体に対し、『栄花物語』風の編年体をとり、内容的にも、公武二重政権下の厳しい現実を見据えるよりは、王朝的な儀式・恋愛等に関心が深い。作者としては、北朝の重鎮であり、当代随一の学者でもある二条良基（１３２０〜１３８８）説が有力である。

11. 宝物集

萩野文庫本。大本（２７.１×２０.７ *cm*）、袋綴、一冊（もと二冊を合綴）。近世初期写。紺色表紙左肩に「宝物集下」と大きくうちつけ書きにする。本文料紙は楮紙。墨付１１７丁。一面１０〜１１行書。「要齋珍蔵」（細野要斎の蔵書印）の朱印あり。本文は二巻本系統に属するが、その中でも、(1)「六道の物語」の占める割合が大きい(2)『法華経』からの引用が詳細(3)女人往生を強調(4)「往生十二門」の順序が異なる　(5)藤原義孝往生説話を欠く(6)所収和歌７８首に独自歌２首を含む、等の特色がある（南里みち子『宝物集』＜在九州国文資料影印叢書〔第二期〕７＞解題）。

『宝物集』は、平安末期、平康頼によって編まれた仏教説話集。現存諸本は、一巻・二巻・三巻・六巻・七巻・九巻など各種あるが、いずれも原形からは遠い。『大鏡』風の対談形式をとって仏理の説明をするという主題と構想は諸本共通しており、この点、説話の記録集成ということのほかに、評論文学としての性格を帯びているといえる。

12. 今物語

細川文庫本。大本（２７.３×２０.１ *cm*）、袋綴、一冊。近世中期写。表紙は薄茶地に紺で春の七草をちらし書きにする。題簽はなく、表紙中央に本文別筆で「今物語」とうちつけ書きにする。本文料紙は楮斐混漉。墨付３３丁。一面１２行書。外題と同筆の朱校あり。

『今物語』は、藤原信実（隆信男）の編と伝えられる鎌倉時代の説話集。内容は、主に平安末から鎌倉期にかけての、宮廷に取材した風流談・情事談・滑稽談等の小話５３編の集成であり、『袋草子』『十訓抄』『古今著聞集』等と共通する話も多い。そこには、新しい時代の潮流に背を向け、過去の輝かしい時に今の自らの存在を結びつけようとする、尚古的な姿勢がいちじるしい。